羽ばたいた「ひな鳥たち」の行方

校長　渡辺　隆

　先日、この春卒業した生徒のお母さんに、偶然お会いしました。
「〇〇さんは、元気で高校に行っていますか？」
「はい、高校生活は、毎日が楽しくて仕方ないようです。」
「うれしいなあ。それが一番ですよね。お母さん、苦労されましたものね。その甲斐がありましたね。」
「本当に、いろんなことがありました。ご迷惑をおかけしました。校長先生、私は、あの子がここまで来られたのは、すべて先生方のおかげだと思っています。本当にありがとうございました。」
「いいえ、お母さん。彼が今がんばれるのは、何があっても決してあきらめず、しっかり見守ってきたおうちの方々の愛情の力なんですよ。」
「校長先生、私は、あの子をずっと見てきて、あの子は学校に育ててもらったということを、心から実感しているんです。本当にお世話になりました。」

　高校に入学することを目指していたのでは、子どもたちをしあわせにできない。中学校のうちに「我慢できる自分」を完成させなければ、高校卒業までたどり着けない。
　これは、私が最近、切に感じていることです。もちろん、中学校だけで「我慢できる自分」が完成できるはずはなく、それゆえに青海地区では、幼保小中の連携や家庭・地域との連携を積極的に進めているのです。

　当校は、昨年、子どもたちに『乗り越える力』を付けるため、保護者の皆さんと相談して、様々な教育活動を続けてきました。数十ｋｍを歩き通すチャレンジウォークを始めたのも、その一環です。そして、最後の3学期、卒業生は本当によく我慢して勉強し、みんなで受験を乗り越えていったのです。

　ふと考えてみますと、当校は、この冬に一度もインフルエンザによる学級閉鎖をしませんでしたが、これは上越地域でも大変珍しいことのようです。これもまた、健やかな心身の成長を目指してがんばった子どもたちの成果なのかもしれません。
　暑い日が続きます。この暑さもまた、神様の与えた試練でしょうか？乗り越えますよ、青中の子どもたちは。